

---

# Tears in Heaven

小鳩ヒナコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Tears in Heaven

### 【Nコード】

N4609D

### 【作者名】

小鳩ヒナコ

### 【あらすじ】

「わたしたちはきつと、地獄に堕ちるよね…」。精神疾患の薬物依存に苦しむ19歳のアズミと28歳の亮平。切ない涙のラブストーリー。

## 第一話（出会い）（前書き）

ケータイ小説用に書いた物語を転載しています。  
難解な文章や表現を削るのに苦労した作品です。

## 第一話（出会い）

1月の初め、しんと静まる寒い日に、ぼくはギターを弾いていた。空はくもっていて、雪が降りそうだった。ここ作業療法室には、誰もいない。ぼくは、この精神病院で、いま診察待ちをしているところだった。

ガシャーーンと、ガラス細工のように壊れてしまったぼくのところ

ぼくは少し涙を浮かべていたかも知れない。…ふとぼくは、外に人の気配を感じた。

「それ、なんの曲？」

顔を上げると、窓の横に高校生くらいの女の子が立っていた。

優しいクリーム色のコートに、バーバリーのマフラー。彼女は整った美しい顔だちに、どこか品のよさをたたえていた。

「”禁じられた遊び”」

「それってなに？」

「ふるーい外国の映画」

「ふうん。どんな？」

彼女は、セミロングの髪をゆらした。

「子どもが、二人でいけないことする話」

なんていいかげんな答えなんだ。

「なにそれ…」

「最後は、女の子と男の子は、離ればなれになるんだよ」

「ええ？」

と彼女は予想外のびつくりを見せた。

「悪いことしたんだから、しょうがないよね」

ぼくは、あまり考えずにそう言った。

「そつかあ…、」

「え？」

「それで、わたしも……」

彼女は、クリーム色のコートをひるがえして、ドアの外へ出て行った。

「いったい、なんだっていうんだ？」

「さぶっ！」

外に出ると、いまにも降り出してきそうなグレーの空だった。

ぼくの病気は、原因不明だ。

2年前突然、胸に激しい痛みを覚えて、あちこちの病院へたらい回しされ、結局、精神科に落ち着いた。つまり、ぼくの病気はこころの問題だというのだ。精神科医も困った様子で、とりあえずぼくに鬱病の薬を出したが、ぼくの胸の痛みは、いつだってズキズキとおさまることはなかった。

「まあいいや。向精神薬Rさえあれば」

ぼくは目をつぶって、薬局で順番をじっと待った。《ピンポン！》と薬局の電光掲示板の音が鳴る。番号札を出し、ぼくは薬の確認をする。すると、ふいに後ろから肩をとんとんされた。

「あのそれ、わたしの薬なんですけど」

え？つと振り返ると、そこに、さっきの美少女が立っていた。

「ほら、番号。85番はわたしのよ」

「えっ？！」

ぼくはあわてて、薬袋と番号札を確認した。薬袋には、確かに《篠田アズミ様》と書かれてある。

えええ？！ぼくみたいに、馬なみに薬を飲むやつが、ほかにいるのか。

ぼくは驚きながらも、彼女に「ごめんっ」と謝った。

篠田アズミは、にこつと笑って、それから言った。

「ふうん…兄さんも患者さんだったんだ」

「…え？」

「てつきり、作業療法士さんかと思った。ギター上手かったし」

そのとき、隣の窓口でピンポンが鳴って、ぼくのほんとうの番号札  
86番が示された。あたふたと、ぼくは薬を受け取る。その間に、アズミはコートを着込んで、カサ置き場で自分のカサを捜していた。それで、カサを持たないぼくと彼女は、ちょうど同じタイミングで外に出ることになった。

外は粉雪が舞っていた。 …

ぼくは時折、空を見上げながら歩いていた。すると突然、アズミが振り返って言った。

「ちよつと、ついてこないでくれる？」

「へ？」

「だからー、わたしの後をついてこないでって」

「ぼくも、そっちの方向なんだよ」

「えええー?!」とアズミは叫んだ。

「あんなさびれたバスに乗ってる人、わたしのほかにもいるの?初めて聞いた」

「ぼくは、そのバス路線のK停留所に用があるの」

「えええええー!!!」とまたアズミが驚いた。

「うそ?!じゃ、わたしと同じじゃない!!」

ぼくも彼女も、同時にびっくりした。

ビシュツとその横を、車が通り過ぎていく。

狭いガードレールの内側を、黙って歩いているわけにもいかないの  
で、ぼくは後ろからアズミに話しかけた。

「あのとき、なんですぐ出て行っちゃったの?さっきぼくがギターを弾いてたとき」

「だってわたし、自分のことを言われたみたいで」  
「え？」

「悪いことしたんだから、離ればなれになっても仕方ないよねって」  
「それ、映画の話でしょ」

「でも、タイミングよすぎ。つい最近、別れたんだよね。中学生のときからつき合ってた彼と」

「そっか…」

「彼もギターが好きだったなあ…」

「アズミ、それで眠れなくなっちゃったの？」

「ううん、それが原因じゃない」

彼女はきっぱりと言い切った。

「眠れなくなっただのは、別の理由」

「…あまり詮索しないでおくよ」

「うん。ありがと」

ぼくらはK停留所に着いたのちも、同じ方角を歩き、結局、一緒に  
とある精神病院に着いてしまった。それだけで、ぼくらは、自分た  
ちの置かれている状況が理解し合えた。

「なあんだ、二人とも病院ハシゴしてたのか」

ぼくはつとめて明るく言ったが、アズミは呆然としていた。

「…兄さんも……中毒患者だったんだ」

つまりぼくらは、一つの病院で出してくれる薬の量では、とても足  
りないくらいの苦しみを抱えているということだった。

「アズミ……、ぼくら、いけないことしてるよね」

「うん……、薬物依存っていうの？わたし、親に隠すのが大変でさ」

「アズミ、歳いくつ？」

「19歳」

「ぼくは28歳。行徳亮平。《亮平》でいいよ」

「亮平」

とアズミはつぶやいた。

思えばそのときから、ぼくらはささやかな共犯者になっていたのだ。

診察後、大量の薬を受け取ると、ぼくらは待ち合わせたようにバス停へと向かった。

あたりはすでにほの暗い冬の街並みだった。

ぼくとアズミとは少しばかり歳は離れているけれど、背丈はなんだかしっくりくるな、なんてぼくは不謹慎なことを考えていた。

アズミはアズミでまた、なにか別のことを考えているようだった。やがてアズミは、下を向きながらポツリと言った。

「ねえ。わたしたち二人ともいけないことしてるわけだからさあ」

「うん」

「もし、わたしたちが友だちになっても、いつか離ればなれになるってことなのかな？」

「え？」

思いもしないことを突然言われて、ぼくは返事が出来なかった。

アズミは、ぼくの胸元を見ていた。

「ねえ、亮平。わたし、いままで誰にも言わなかったんだけどさ」

「うん」

「それでもわたし、眠れなくてほんとうに辛いの。わかってくれる？」

「ぼくもだよ。よくわかるよ」

アズミの瞳が、そのとき初めて真正面からぼくをとらえた。彼女の空白の透き通った瞳に、ぼくはどきりとした。

バス停の黄色いライトが、雪明かりににじむ二人の姿をぼんやりと照らし出していた。



## 第二話（光と暗闇のなかで）

アズミと出会ったその夜、ぼくは部屋でパソコンの前にいた。

《ギター大好き！！の集まり》

ぼくは、そのチャットルームの常連で、そこでみんなとギターを演奏したり、近況をログで話し合ったりしていた。

『つぎ、わたしが弾いてもいい？（．．．）』

『ドゾー』

『コージと一緒に弾くよ？』

『おkですー』

ハンドルネーム：s a y a | x x x と k o j i 2 0 0 0 は、ここでカップルになり、一緒に住んでいる。

二人は、サヤとコージと呼ばれていた。

『88888888』

演奏が終わると、みんなで拍手した。

『つぎ、誰？』

『ぼく、いいですかー？』と k e n t a 4 0 4（ケンタ）が書き込んでくる。

ケンタがラブソングを弾き語り始めたので、

『彼氏ほしーよー．．（＊つ＜＊）．．』と m i l k | h i m e 7 0 1（ミルク）が泣いた。

そのとき、サヤがぼくにそっとプライベートメッセージを送ってきた。

『亮平。ミルクが誘ってるよ』

『なんだよ、それー』

『ミルク、こないだ亮平に会ってみたいって言ってたから』

『あいつ、誰にでもそう言うんじゃないか？』

『それはないでしょ』

『そうかな』

『でも、オフ会したら絶対来るよ、あの子』

『オフの予定あるの？』

『ないけどwww』

サヤがにやつと笑うのが想像できた。

『でもさ、亮平の胸の痛み、カノジヨできたら消えるかもよ？』

ぼくは、アズミのことを思ってたドキツとした。

『彼女がいるいないは関係ないってば……』

『でもモトカノと別れたときからなんでしょ？その痛み』

『モトカノのことはもう忘れた』

『チャンスなのにー』

『チャンスじゃないよ』

『どして？会えば気が変わるかもよ？』

いや、いまのぼくにそれはない。

『サヤとコージみたいに、誰もが上手くいくわけじゃないだろ』

『イヤイヤ。それがね（；；・・）』

『なんかあるの？』

『コージ、誰かと浮気してるって噂あんの。。』

『まさかー。嘘だろ』

『ならいいケド』

そのとき、ケンタの弾き語りが終わり、みんなで8888と拍手した。

『いいね』

『+。 d（・・）+。・。＊イイ』  
『アリガト（@。@）』  
次々ログが流れていく。

『よかったよー>ケンタ』とぼくも書き込んだ。  
ラブソング…、カノジヨか…。

アズミとは、また病院でばったり会えるんだろうか。

『さて、ぼくもがんばって練習しよう』

『あれ？落ちるんですか>亮平』

『うん、明日早いからな』

ぼくは、嘘をついた。

さつきから、胸の痛みが、ズキズキとひどくなり始めていたのだ。

\*\*\*

ぼくは、胸の痛みと格闘していた。

ズキンズキンズキン…。

苦しい。誰か、助けてくれ。

でも、誰もぼくの苦しみをわかってくれる人なんていない。

ぼくは、テーブルにあったRを飲んだ。

これだけが、ぼくの痛みを2・3時間癒してくれる薬だった。

「薬物依存ってやつ？」

アズミの言葉が思い出される。そうかも知れない。  
そのとき、深夜だというのに、ケータイが鳴った。

「R、足りてます？余ってますけど…」

「いくら？」

「10粒8000円ではどうですか？」

電話の相手は、見も知らぬ女の子だ。精神科関係のチャットルーム

で偶然知り合った。

「高いな」

「えゝ、そうですか？」

「いま足りてるから要らないよ」

「じゃ、また今度ですねー」

電話の相手は用がすむとすぐ切った。希薄な関係だ…。

ぼくは、寝返りを打ちつつ、いろんなことを考えた。

将来のこと。

ぼくは本来、IT関連企業に勤めていたが、それもいまは就労できない状態だった。

さらに一錠睡眠薬を飲んで、何度も寝返りを打ったあげく、ぼくはついに近所のコンビニへ行くことにした。

「眠れないときは、少し動いた方がいいんだ…」

コンビニへ着くと、ぼくは慣れた足取りで、雑誌コーナーへ向かった。

すると、そこには、

奇跡のように、

アズミの姿があった。

### 第三話（アズミの身の上）

「眠れないの？お兄さん。いい薬があるよ」

とアズミがふざけて言った。

「いらないよ。もう今日は眠れねえって決めたんだ」

「へんな日本語」

そう言いながらも、彼女は「これ効くから」と薬を何種類か出してきた。

ぼくはそれを受け取った。なかにはRもあった。

いたずらっぽくアズミは目で笑ってみせる。

「じつは、薬のシートを捨てに来たの。家のゴミ箱から見つかる大変だから。いつもコンビニで捨ててる」

ぼくは、彼女も闇ルートを持っていそうな気がした。

「ところで、その顔どうしちゃったの？」

ぼくはアズミの頬を指さして尋ねた。そこには出来たばかりの紫色のあざがあった。

「わたしね、さっき父親に殴られてきた」

「えっ?!」

「うちの家って、最悪なんだよ……」

「よくあるの？こういうこと」

アズミは、下を向いてうなずいた。

「お父さん、女つくっちゃってさ」

「……」

「夫婦でケンカばかりしてるくせに、わたしには、就職しろとかなんとかうるさく言ってくるの。あれでもお父さん、警察官なんだよ。信じられない」

アズミは長いため息をついた。

「さっきもわたし、ケンカを止めようとしただけなのに……」

アズミは棚のファッション雑誌を横目で見ながら、ため息をついた。  
「イギリスに留学してた頃はよかったなあ……。たった1年間だけど、  
帰ってきてから、家のなか、ますます冷え切っちゃってさー」

「イギリスに留学してたんだ？」

「お父さんから逃げるためにね。だからわたし、英語は話せるよ」

「へえ、かつこいい」

「どうでもいいよ、そんなこと」

アズミはさらに続けて言った。

「とにかく、お父さんの教育は、殴ったり何時間も正座させたり、  
わけわかんないの。わたし、もう我慢できなくなつてさ」

それで、薬に頼るようになったのか、とぼくはこころの中で思った。

「なあ、アズミ」

「なに？」

「ぼくんち、来ない？」

「えー！ー！なに言つてんの？？」

アズミは笑った。

「そんな簡単についていけないよ」

「あはは、冗談だよ」

ぼくは、アズミを元気づけようと思った。

「部屋は部屋でもチャット部屋。ぼく、a h o o！チャットの《ギ  
ター大好き！！の集まり》によくいるんだ。遊びに来てよ」

「うん。ありがとう」

アズミは嬉しそうだった。

「下手なギターを聴かせてやるから。仲間もいるしな」  
「うん」

ぼくは、アズミのメアドを聞きたくてたまらなかったのだが、アズ  
ミが、「そろそろ帰らなきゃ」と言い出したので、チャンスを逃し  
てしまった。

まあ、いい。彼女が、チャットルームに来れば、いつだってそれは

聞けるんだから。

「じゃ、送っていいとか？」

「いい、いい。すぐ近くだから」

「アズミ、気をつけてな」

「亮平もね。おやすみ」

「おやすみ」

こうして、ぼくらはコンビニの前で手を振って別れた。

アズミのそのときの柔らかな手つきを、ぼくは決して忘れない。

#### 第四話（アズミとぼくとギター仲間と）

3日後、アズミがぼくらのチャットルームにやって来た。

彼女のハンドルネームは、x x a z u m i x x だった。

ぼくがアズミを紹介すると、常連たちがさっそく詮索を始めた。

『オオオオ、（\*。。）ノ オオオオ 亮平のリア友!!』

『・：\*：・（\*、\*）ノ・：\*：・ ヨロスク >アズミ』

『もしかして彼女? >亮平』

『え まじか? 亮平』

『違うつて：：』

『ちがいますよー』

ぼくとアズミは、同時に恋人関係を否定した。

だが、ぼくのあたまのなかは、アズミのことでいっぱいだった。

x x a z u m i x x のハンドルネームが、ぼくには光ってみえた。

『なんか弾いたら? >亮平』

ケンタにうながされ、ぼくは、イーグルスの”Hotel Callifornia”を弾き語りした。

『8888888888』とみんなと一緒に拍手をしてくれたあとで、アズミは、

『予想外に上手い』

とぼくをほめてくれた。それから、

『ねえ、コージさんがなんか言ってくるんだけど』

とぼくにプライベートメッセージを送ってきた。

『コージが? なにを? ?』

『なんか：ナンパみたいなの。無視していい?』

『いい、いい。コージはサヤの彼氏だよ。冗談なんだってw』

『リョーカイ』



アズミと毎日のように接することが出来るのは、ぼくにとって最大の楽しみだった。

『亮平の歌声、わたし好きだよ』

『ありがとう』

『そのこと、サヤにも話したんだ』

『サヤとプライベートメッセージ？仲いいんだね』

『うん。このまえ、みんなの前で私のイギリス留学の話したでしょ？そしたらサヤさん、自分もいたことあるって』

『へー？』

『ちっちゃい頃だったから、英語だいぶ忘れたらしいけどw』

『でもたしかに、発音いいよね』

『うん。サヤさん、イギリスを懐かしがってた。』

『教えてあげれば？』

『うん！じつは住んでた場所も近いんだ』

『へー。ロンドンって狭いんだな』

そのとき、ぼくのパソコン画面に、サヤからのプライベートメッセージがパツと出現した。

『ハローッ！！』

『どつたの？サヤ』

『今日、病院行って薬変えてきた』

『睡眠薬？』

『うん。でも、コージが車で連れてってくれて楽だったよ』

『いいなあ。ぼくなんかいつも一人で淋しいよ』

『アズミ、誘えばいいじゃん』

『えっ』

『聞いたよ。あの子も、精神科通いしてるんだってね』

『そこまで話したのか、あいつ』

『うちら、仲良しだもんねー(@、)、人(^^)』

『どこまで知ってるんだよ…』

『女同士の内緒だよー』

『なんか怖いな』

『そんなことないよ。アタシ、亮平のモトカノのことなんか言わないもんね』

『信じてるけど』

『アズミ、いい子じゃん。亮平、モノにしちゃえー』

『なんだよ、そのモノって』

『カノジヨにしちゃえー』

そのとき、アズミが再びメッセージを送ってきた。

『ちよっとお母さんに呼ばれたから、落ちるね』

xxazumixxのハンドルネームが、パソコン画面から消えた。ぼくは、かなり残念だった。いつものことだけだ。

『アズミ、落ちちゃったね』

サヤから再びログが流れてきた。

『うん』

『身体、しんどいのかなー』

『え？』

『アズミ、すごく悪いんでしょ？このまえ、飲んでる薬の量聞いてビックリしたよ』

ぼくは、なにをどこまで言っているのかわからなかった。

『やめさせないと。いつか死ぬよ。ふつうの人が飲んだら卒倒する量じゃん？』

『そうだけど…』

『病院ハシゴなんてよくないよ。アズミ、頭いいからそのくらいのこと、わかってるだろうに』

『うん…』

そう言われると、ぼくはキュッと胸が締めつけられるようだった。

>それでもわたし、眠れなくてほんとうに辛いの。      わかってく  
れる？<

初めて会った日の、アズミの真剣なまなざしを思い出した。

そこまで飲まなきゃ、眠れない苦しい日々を、いつたいどれだけの  
人が送ったことがあるだろう。

ぼくは、アズミの苦しみは、ぼくにしか受け止められないのかも知  
れないと思った。

## 第五話（二人一緒に）

アズミと出会ってから1ヶ月半も経っていたのに、ぼくはまだアズミのメアドを知らなかった。

『アズミ、メアド教えてくれる？』

翌日、ぼくは何気なさを装って、いつものようにチャットのログを打った。

『いいけどなんで？』とアズミが尋ねてくる。

『今度、一緒に病院に行かないかなと思って』

『そうだねー』

『どうせ待ち時間、退屈でしょ？』

『（。。。）（。。。）ウンウン』

『チャットだとすぐに連絡つかないしさー』

『うん。行こう行こうw』

アズミは、すぐに自分のメアドを書いてきた。ぼくはケータイをつかみ、速攻メールを送った。

『あ、いま来た』

『いった？』

『おっけ』

『これでいつでも話せるねw』

アズミのログもどことなく嬉しそうだった。

『診察日、ちようど明日だよね。何時にする？』

『じゃ、10時に 駅前とか？』

『らーじゃ。また変更あったらメールするね』

『ok』

ぼくは、こころのなかで「YES!」とこぶしを握っていた。これからずっと、病院のあの退屈な待ち時間を、アズミと過ごせるんだ。

そのとき、手に持っていたケータイが鳴った。ぼくは、ピツと即座に反応した。

「リヨウヘイさん、こんにちわ」

電話の相手は言った。それは、Rの売人をやっている例の女の子からだった。

「薬なら足りてるけど」

ほんとうはそうでもなかったが、ぼくは彼女とはあまり付き合いたくなかった。

「いえ、そうじゃないんです」

「じゃ、なに？」

「リヨウヘイさん、スニッフって知ってます？」

「スニッフ？」

「薬を砕いて、鼻から吸うんです。その方が効き目が長持ちするんですよ」

天使のようなかわいい声で、女の子はくすくす笑った。

「ただし、鼻水出ますけどね」

「それで、それがどうしたの？」

「その道具、要らないかなあと思って」

「そんなもんまで売り始めたのか」

ぼくは少しあきれた。この子は、いったいどんな生活してるんだろう。

「いえ、あたしの使いかけなんですけど…。べつに汚くないので。

あたし、新しいの買ったからもったいないなと思って」

「いいって。俺は要らない」

電話を切ったが、少し気になることがあった。

…薬の効き目が長持ちする。…

正直、たった2・3時間しか効かない薬を、一日何度も飲むのは気が引けたし、経済的にも辛かった。でもそれだけは、手を出すべき

じゃない　　∴。

アズミはその日、例のクリーム色のコートの下にワンピースにブーツ姿で登場した。

「お。かわいい」とほめたら、「どこがよ」と意外とアズミは反抗した。

ぼくらは、電車に乗って、二人が初めて出会った病院へ向かった。今日は、このまえと違ってとてもいい天気で、二人ともなんとなくワクワクしていた。

「ぼくさー。病院行くのがこんなに楽しいの、初めて」

「わたしも」

「やっぱ一人だとしんどいよね」

「うん。待ち時間がいちばん気がめいる」

「今日の待ち時間、どうする？」

「そうね」

アズミは少し考えてから言った。

「わたし、亮平のギターが聴きたい」

「おけ。じゃ、作業療法室だな」

ぼくらは、病院で診察券を出すと、すぐに作業療法室へ入っていった。そこには、まばらに人がいたが、治療時間だからかまわないだろうと、ぼくは思った。

「なにがいい？」

部屋のすみにあったギターを取り出して、ぼくはアズミに尋ねた。

「このまえのやつ」

「えっ？また”禁じられた遊び”？いいけど、しぶい曲好みだねー」

「あれから、あの映画観てみたんだ」

「へえ」

「もうびっくり。すごーく泣いた。ラストがかわいそすぎる」

「そっか。」

じゃあ、ぼくのギターで、もひとつ、泣かせてあげましょう」

ぼくは、ギターを弾き始めた。アズミはぼくの隣にぴったりと座って、じつとぼくの手つきを見ていた。ぼくは彼女の視線を感じて、少し緊張してしまった。

窓から冬の陽が、やわらかく差し込む。ほこりがわずかに舞うなかで、ぼくらは、ゆっくりとした時間を過ごしていた。

「ぱちぱちぱち。ありがとー。亮平」

「なんだ、泣けよ」

「あはははは」

アズミが明るく笑ってくれたことで、ぼくも幸せな気分になった。

「そろそろ、様子見に行くか」

「うん」

アズミが立つ。ぼくも立ち上がって、彼女とぼくは、ちょうどいい背丈のシルエットをつくる。

ぼくがアズミの瞳をとらえようとすると、彼女はすでにぼくを見ていて、視線がぶつかった瞬間、彼女ははっとその美しい瞳をまぶたにふせてしまった。

そのとき、ぼくの中のなにかがぼくの背中を押して、ぼくはアズミの手をそっと握った。

## 第六話（禁じられた遊び）

ぼくら二人は、まるで悪だくみをして遊んでいる子どものようだった。

病院でお互いの視線を見つめあい、手をつないで薬局へ歩いていく。二人でおずおずと。禁断の甘い蜜への道のりを。

ある日、ぼくらは最後の薬局を出てから、いつものように手をつないで歩いていった。すると、アズミが突然言った。

「ねえ、ちよつとカラオケにでも行かない？」

「カラオケ？」

「たまには、わたしにも歌わせてよ」

「それもそうだな」

「ちよつと、見せたいものもあるし」

「へえ。なんだろ」

ぼくは呑気に彼女についていった。そしてぼくらは、駅前にあった一軒のカラオケ屋に入ってしまった。

部屋のソファに座ると、アズミはさつそく、《見せたいもの》をバッグから取り出してきた。

「なにこれ？」

「スニッフ。スニッフの道具だよ」

ぼくは、目を大きく見開いた。

「アズミ、なんでこんなもの、持ってるの？」

「なんでって。ネットで売ってたから」

「おまえ、それ自分で使う気で買ったの？」

「えっ……」

ぼくは、激しく動揺した。

「っ、おまえ、バカか?!」

思わず、ぼくは大声で叫んでいた。



「バカって」

「こんなもんで、薬吸うつもりでここに来たのかよ!!」

アズミの身体が、ビクツと響いた。

「だって…、鼻から吸うと、薬が長持ちするって書いてあったから…」

「怒ったの？亮平」

「当たり前だ!!」

「わたし…、わたしたちが、少しでも薬を減らせたらと思って」

アズミは、もう、半泣きだった。声がぶるぶる震えていた。

ぼくは、悲しさを抑えきれず、その道具を荒々しく壁へ投げつけてやった。ガシャンと音がして、それらは床に無残に散らばった。

「ごめん…。亮平。ごめん」

アズミの目から、涙がぼろぼろこぼれた。

「アズミ、もう二度とこんなことしないで、ぼくに約束してくれる?」

「うん」

「頼むから」

「ごめんね…亮平」

アズミは、泣きやまなかった。ぼくは、やりすぎたかなと思い、彼女に謝りたい気持ちになってきた。

「…アズミ。もう怒ってないから」

「亮平」

突然、アズミの両手がぼくの腕をつかんだ。

「亮平、お願い。わたしを嫌いにならないで」

「嫌いになったりなんかしないよ、アズミのことは、絶対。…」

それは、ほとんど告白だった。ぼくらはお互いに見つめあった。アズミの瞳がうるんでいた。

ぼくは、アズミの手を、ぼくの腕からそっとほどき、ぼくの両腕で彼女の肩を包み込んだ。

やがて、アズミの顔をこちらに向かせると、震える身体を落ち着かせるように、ぼくは彼女に口づけた。

## 第七話（緊急電話くエマージェンシーコールく）

カラオケ屋での一件のあと、ぼくらはいままでよりもずっと、打ち解けあって話をするようになった。

「亮平の胸を痛がつてるの、わたし見てられないわ」

「そう？」

「うん。ときどき、すごく辛そうな顔してる」

「それを言うなら、アズミだって」

「わたしのは、単なる睡眠不足だったりするけど…」

「ぼくのは、気にすることないよ」

ぼくらは、冬の公園にいた。

その日は、通院ではなく、アズミが会いたいとぼくに言ってきたのだ。

「立ち入った話を聞くようだけどさあ」

「どうしたの？」

「その胸の痛み、モトカノと別れたときからなんでしょ？」

「え」

「サヤさんから聞いたの」

「ああ…あいつめ」

ぼくは、こころのなかで舌打ちをした。

「そんなに、モトカノのこと、好きだったの？」

「まあ、好きだったけど」

「妬けちゃうなー」

「でも、いまはほんとになんとも思ってない」

枯れた噴水のところで、親子連れがハトにえさをやっていた。

「じゃあ、なぜ胸の痛いのが治らないのかな？」

アズミは、ぼんやりと疑問を投げかけた。

「わからない。…別れた瞬間、ほんとうにガシャーンって音がして、

胸が壊れたみたいになっただ。その彼女とは、19歳のときから6年間つき合ってた。一緒に住んでたよ」

アズミは、だまっておとなしく聞いていた。

「アズミ、ぼくのもトカノのこと、気になる？」

「うん…少しだけ」

「いまは、アズミのことしか見てないから」

アズミが顔を上げて、ぼくを見て笑った。

「ねえ、亮平。わたし、お願いがあるの」

「なに？」

「辛いことがあったら、わたしに、エマージェンシーコールして？」

「エマージェンシーコール??」

エマージェンシーコール

「緊急電話よ。もし、亮平の胸が痛くて、眠れないようなときは、コンビニに行くんじゃないで、わたしに電話して」

「うん」

ぼくは、素直にうなずいていた。

「そのかわり、わたしも辛いことがあったら、亮平に電話する。それで、亮平に助けてもらうの」

「いい案だね」

「お互い、助け合おうよ。それでいつか…」

「いつか?…」

「二人とも、薬がなくても眠れるようになったらいいね」

「そうだね」

ぼくは、それが決して夢ではないような気がした。アズミは、立ち上がって、ぼくの手をうながした。

アディクション

「薬に依存するのはいけないことだけど、わたしに依存なら、うれしいわ」

アディクション

ぼくらは、手をつないで、ベンチをあとにした。たくさんのハトが飛び立った。ぼくは、今日の彼女のことを、天使みたいだ、とこっそりつぶやいた。

## 第八話（二人ぼっちの夜）

アズミが発案した緊急電話は、エマージェンシーコール意外と早く使われることになった。アズミが、父親に殴られて怪我をしたのだ。

それは大雨の晩のことだった。

アズミは濡れた髪で、ぼくの部屋に逃げてきた。寒さでブルブル震えている。

ぼくは彼女に、転がっていたタオルと毛布をかけて、冷蔵庫にあった牛乳をマグカップに入れて温めて出してやった。

「薬のシートが部屋に残ってて、それが見つかったの。いろいろ聞かれて、返事をしなかったら、お父さんがいきなり……」

彼女の切れた額には、すでに治療済みだった。ここへ来たのは、病院から家に戻ったあとだと言う。

「家に帰ったと思ったら、今度はお母さんがお父さんとケンカ始めて。例の女の人のことよ。二人とも、わたしのことなんか見てないの」

「ひどい目にあっちゃったね……」

「もう、わたし、あの家にいるの、イヤ」

アズミの言うことは、じゅうぶん理解できた。ぼくは、このままアズミを家に帰していいものかどうか迷った。

「とにかく、少し落ち着いて。アズミ」

「落ち着くもなにも、無理よ！」

アズミは声をあげて泣いた。ぼくは、彼女の背中をさすってやった。かわいそうに。……なんてことだ。ぼくは、自分のこころまでが痛んだ。

「アズミ、泊まっていくか？」

「……………」

「せめて、落ち着くまでここにいなよ。家にはなんとか言って」

「……………」

「できる？」

「……………んっ…」

「わかった。じゃ、電話して」

アズミは、しゃくりあげながらも、自分のバッグからケータイを取り出し、「今晚、優花のところに泊まるから」と言った。

「泊まりでいいの？」

「……………んっ…」

「おっけ。じゃ、リラックスして」

ぼくが彼女の肩をぽんぽんとやると、アズミはうんうんとうなずいた。

「大丈夫？」

「……………ん。ごめん」

「ごめんなんていいから。ぼくら、助け合う仲だろ？」

「そうだね」

アズミが少し笑った。

「ぼくが、アズミを見守ってるから」

「ありがとう」

「ぼく、アズミが笑ってる顔が好きだよ」

「うん」

「アズミが苦しいと、ぼくも苦しい」

部屋の外は、まだ大雨だった。ぼくは、アズミをぎゅっと抱きしめた。彼女の身体は、まだ少し冷えていた。

「アズミ、寒くない？」

「少し」

「布団に入れよ、アズミ」

「うん。亮平、ありがと」

アズミは、敷きっぱなしの布団の中に、そりともぐり込んでいった。

「…亮平の匂いがする」  
「そっか」

とぼくはアズミに微笑んだ。彼女のしぐさのすべてが、いとおしかった。

「亮平、こっちに来て」とアズミが手を差しのべる。

ぼくは、どうしようかと迷ってから、彼女の布団の横にすべり込んだ。

「…雨、まだ降ってるね」

「今晚はやまないだろ」

「わたし、亮平のことが好き」

「嬉しいね」

「亮平は？」

ぼくは、答えのかわりにアズミに言った。

「…もし、ぼくがライオンなら」

「ライオンなら？」

「たくさん動物のなかから絶対、アズミを選んで襲う。ダッシュでがぶつと噛みつく」

「ふふっ。わたし、脚速いんだよ」

「でも、いまは弱ってる。弱っている草食動物にかぶりつくライオンは卑怯」

「そうなの？」

「そうなの。だからぼくはたとえライオンでも、いまのアズミは襲わない」

でもそう言いながら、ぼくはアズミのまぶたに、わからないようにそつと口づけていた。

「よく緊急電話<sup>エマージェンシーコール</sup>してきてくれたね。ありがとう」

「だって、わたしには亮平しか」

「…ぼくら、共犯者だもんな」

ぼくは、立ち上がっていつもの睡眠薬を口にふくみ、それをアズミに与えた。

「ぼくはさつき、アズミを襲わないって言ったけど」  
「うん」

「…少しだけ、嘘ついていいかな」

「…いいよ。少しだけなら…」

ぼくは、彼女の首筋にそつとキスした。

「二人でいるとあつたかいな、アズミ…」

「うん…亮平…」

ぼくは、両腕をアズミの背にまわした。彼女の、ぼくの背をつかむ指の力が、睡眠薬が効くにつれ、どんどん抜けていく。

そのままぼくらは、抱き合つたまま眠りについた。

「いつか薬なしで眠れる夜を、一緒に過ごそうね…」

降りしきる雨の音のなかで、ぼくは最後にそんな声を聞いたような気がした。



## 第九話（月明かりのなかで）

やがて3月の終わりが来て、アズミは20歳になった。

真昼の午後、ケーキに20本のろうそくを立てて、ぼくはアズミにCDをプレゼントした。

僕がいま、練習しているエリック・クラプトンの曲だ。

「わあ、ありがとう」

アズミはさっそくそれを聴いた。彼女は嬉しそうに、「今度、亮平バージョンも聴かせてね」と言った。

「ところでわたし、タバコ臭くない？まえから、少しずつ吸ってるのよ」

「ぼくも吸うから臭わないけど」

「もう20歳だもんね。これで親にも堂々と言い訳できるわ」

ぼくには、タバコなんてどうでもよかった。ぼくはふいに、彼女を引き寄せてキスした。

彼女はかなりびっくりしたようだった。

「臭ってない、臭ってない」

「……って、あー！ー！なによ、いまのちよつと？！」

「あはははは」

彼女が焦って紅茶をこぼしているところへ、さらにぼくは追撃を加えた。

「だから、ぼくはライオンだって言っただろ」

「“もし”がついてたでしょ、あのときは」

「つまり、可能性があるってことでしょ、もしもし、おねえさん？」  
本気でアズミが、おろおろし始めたので、ぼくはこのへんでやめておこうと思った。

そのとき、ぼくのケータイが鳴った。なんだ、せつかくのいい昼下

がりに。

ぼくは、大げさにちつと口に出して、「もしもし」と電話に応答した。それは、《ギター大好き!!の集まり》の常連ケンタからだった。

「あ、亮平さん? ちょっといいですか? 大事な話なんですけど」

「大事な話?」

「じつは、落ち着いてくださいね…、あの…サヤさん、お亡くなりになったんです」

「えええー?!」

ぼくが大きな声で答えたので、アズミが振り向いた。彼女は目ざとく、ぼくの表情を見てしまった。

「おとといの晩、睡眠薬を大量に飲んで。眠っている間に吐いたものが気管支から肺に入って、それで肺炎起こしたらしいです。そういう死に方ってあるんですね」

さらにケンタが続ける。

「コージさん、ミルクと浮気してたらしいですよ…」

電話を切ったあとでも信じられなかった。あんなに、元気だった人が死んでしまうなんて。こんなに簡単に。

呆然とするぼくを、アズミが見逃すはずがなかった。

「なに? なんの電話だったの?!」

ぼくは、説明しないわけにいかなかった。だが、そのタイミングを誤ったかも知れない。

アズミのシヨックは予想以上だった。

「うそ…! サヤさん、いつかオフ会で会おうって約束したのに…!」

「落ち着け、アズミ」

「コージさん、どうして?! ひどい!!…駄目、辛い、わたしも飲んでしまう」

「やめろ、アズミ!」

あつと言う間に、彼女はバッグを開け、自分のピルケースの中身をざらざらつと飲み込んでしまった。

いったい、どんな薬が何錠入っていたかもわからなかった。

ぼくは急いで、アズミを洗面台に連れて行き、口のなかに指を突っ込んだ。

ゲホゲホと咳き込みながら、彼女は胃の中のを吐き出していた。20歳のケーキの残骸が流れていく。

「亮平、くるしい。やめて」

「だめだ」

もういいだろうというところまで、ぼくは徹底的にやった。万がーでも、彼女になにかが起こって欲しくなかった。

ぼくはもう、アズミなしでは生きていけない。そのことを、何度も何度もあたまのなかで反芻していた。

「げほっつ…げほっ…」

アズミの目から、涙が浮かぶ。

「よし、これで全部出たな」

ぼくは、アズミを抱きかかえて、部屋へ戻った。

「おい、大丈夫か」

「……………」

「アズミ？」

しばらく様子を見てみると、アズミは涙ぐんだまま、ぐったりと眠りについてしまった。ぼくも少し疲れを感じて、シャツをゆるめてそのままアズミのそばで横になった。

ふと気がつくと、真夜中だった。

月明かりのなか、ぼくの目のまえに、アズミのうるんだ瞳があった。  
「大丈夫か、アズミ」

「うん…ごめん、亮平……」

どちらからともなく、ぼくらは身体を寄せ合った。アズミの目から、再び涙がこぼれた。

「あんなにいい人だったサヤさんが、死んじゃうんだもん…」

ぼくは、彼女の背中をなだめるようにさすった。

「悪いことをしているわたしたちは、きっと地獄に堕ちるよね…」

ぼくは、ぼくらは、死の恐怖から逃れるかのように、しっかりと抱きしめ合った。

部屋の外には、蕾をつけた桜の木があった。

震えるアズミをあたためるために、ぼくはていねいに蕾をひらくように、彼女をほどこいていった。

「亮平」とアズミがつぶやく。

ぼくは、彼女の唇に優しく口づける。

蕾のなかには、白く染まったアズミの肌が、小さくひろがっていた。ぼくの大きな胸をそこに重ねると、ふたりの鼓動がどくと共鳴した。

大丈夫、ぼくらは生きている。なにも心配することはないよ、アズミ。

このままふたりで死んでしまっても、地獄へ堕ちたりなんかしない。

## 第十話（同棲生活・1）

ぼくは結果的に、弱った草食動物を力づけるライオンになった。

アズミは翌日、大荷物を持って、ぼくの部屋にやってきた。

「わたし、家、出てきちゃった」

「まじかよ?!」

ぼくはそのとき、食べかけていたバタートーストを落としそうになった。

「親は？なんて言ってるの？」

「ケンカばかりしてる親に反対なんて出来ないよ。この場所は言っていない」

アズミは平然として言った。信じていいものか？

だけど、アズミだってもう20歳だ。自分の行動には責任を持っているだろう。

結局、彼女はぼくの部屋に住むことになった。

「そうだ。《ギター大好き!!の集まり》に報告しよう」

「なにを？」

「ぼくとアズミが、一緒に住み始めたことさ」

「えー、なんか恥ずかしいなあ」

ぼくはパソコンを立ち上げ、チャットルームに入って、《ギター大好き!!の集まり》のやつらに声をかけた。

『久しぶり>亮平』

ケンタが挨拶してきた。

『サヤがいなくなって、寂しくなったな』

『そうだね。あれから、コージもミルクも来なくなっただし。早くも別れたって噂だけど』

『もう別れたのか、あいつら』

ぼくは、後ろの台所で不器用に包丁を扱いながら、豆腐を切ってい



ピー紙を見て笑う。

「覚えられるわけないよ、英語なんだから」

「あはは。全然知らなかったー」

「そ。ぼくはいつも、これ必死で読んで、きみにも聴かせてたの」

アズミは、クリップボードを埋め尽くしている、たくさんの歌詞をじつと眺めていた。

そして、くるりとぼくを振り向いて言った。

「ねえ、亮平。今度、わたしのためになにか弾いてくれる？」

「いいよ。いま練習している”Tears in Heaven”を、あなたに捧げましょう」

アズミは、につこりと、ぼくをどきつとさせる笑顔をみせた。

ぼくは思わず、アズミの髪をそつとなでた。アズミが心地よさげに、ぼくに向かって目をつぶる。

ぼくらは、長いキスをした。

窓の外からは、満開の桜が見えた。

春の訪れが、ぼくらを祝福してくれているようだった。

ねえ、亮平。サヤさん、きつと天国へ行ってるよね。…

アズミは、ぼくに寄り添って、「いまがいちばん幸せ」と言った。

## 第十一話（同棲生活・2）

ぼくらは幸せに暮らしていたが、二人とも、これといった収入がなかった。

ぼくは、いままで、わずかな貯金と年金で暮らしてきた。

二人で生活すれば、そのうち貯金もなくなってしまっただろう。

「わたし、バイトすることに決めたわ」とアズミが宣言した。

「病気なのに、大丈夫なの？」

「大丈夫。わたしが働くから、亮平は家事をして。わたし、いままで全部お母さんにやってもらってたから、まともに料理も出来ないし」

アズミはさっそくバイトを始めたが、ぼくは、彼女の身体が心配でたまらなかった。

ある休日の午後、アズミは死んだように青い顔で、畳の床に転がっていた。

ぼくは、異常なものを感じて、「アズミ?!」と大声をあげて彼女を揺さぶった。

アズミは、目を半分開いて起きた。

「...あ...、寝てた.....。どうしたの？亮平」

ぼくはホッしたが、心臓はドキドキしたままだった。

「アズミ...。バイト無理してんじゃないか？ぼくもバイト探すから、少し休めよ」

「駄目だって。二人ともつぶれたら、おしまいじゃない」

「そりゃそうだけど」

「大丈夫。それでもわたし、バイト先で重宝されてるのよ。英語が出来るからね」

でも、日増しに彼女の薬はどんどん増えていき、その量はぼくが



見てもものすごいものになってきた。ゴミ箱をのぞくと、そこは数々の薬のシートであふれかえっていた。

「アズミ、限界だよ。もうバイトやめろよ」

「いいの。亮平と一緒にいるためだもん。わたし、がんばるから」

「でも、アズミ…、このままじゃ死んじゃうよ？」

ぼくは真剣に心配していた。

「やだあ、亮平。死ぬわけなんかないじゃない」

アズミは弱々しく笑った。でも…、ほんとうにこのままでいいのか？

>やめさせないと。いつか死ぬよ。<

ぼくは、サヤが生前、ぼくに言った言葉を思い出す。

ぼくは、ぼくのなかで、不安の波が徐々に広がっていくのを感じていた。

## 第十二話（突然の別離）

ぼくとアズミが同棲を始めてから2ヶ月が経ったある日のことだった。

いつものなんでもない朝、ぼくはギターの弦を買いに、楽器店へ行っていた。

「お父さんに、家に連れ戻されたの」

最初、電話を受けたとき、ぼくはアズミの言っていることの重大性が、すぐに理解できなかった。

「なに、どういうこと？」

「病院に行ったら、待合室にお父さんがいて」

「えっ?!……」

「それで、いま家にいるの。亮平のことは言っていない」

ぼくらは、ぼくの用事がすんだあと、病院の待合室で落ち合うことになっていた。

「お父さん、待ち伏せしてたのか」

「そうなの。…お父さん、なにも言わずに、わたしを車のなかに引っ張っていった」

「大丈夫?殴られなかった?!」

「平手で一発…それ以後なにも言わないし、なにも聞かないの。…それが、余計こわくって」

「アズミ…」

「お母さんは困った顔してるし、わたし、部屋にいることしか出来なくて…」

「それで…」

「亮平、わたし…、しばらく外に出れないと思う」

「…」

「亮平、ごめん」

ぼくは、気をしっかり持て、と自らを励ましながら必死で言った。

「アズミ、大丈夫だよ。ぼくら絶対、近いうちに会えるよ」

「うん、亮平」

「なんかあったら、緊急電話してこいよ。絶対だぞ？」

エマージェンシーコール

「うん、亮平も……」

「ぼくらは、何があってもちゃんとつながってるんだから」

「……うんっ……っ」

「泣くな」

そう言いながら、ぼくも病院の入り口で、人目もはばからず泣いていた。

アズミと突然別れることになってから、ぼくは抜け殻になっていた。アズミのいない部屋……。ぼくにとつて、それは辛すぎる。

ぼくは、アズミが残っていた服や、マフラーなんかを、ときどき眺めてはそっと抱きしめた。

アズミ。早く帰ってきて。ぼくは痛むところを抱えて、毎日祈っていた。

「すぐ、そっちへ戻るから！」とアズミは電話やメールやチャットで、ぼくを励ましてくれた。

しかし、事態はそう簡単でもなかった。

ぼくは、まず、自分が立ち直らなければならないということを悟った。

こんな、薬物中毒みたいな人間を、厳しい警察官の父親が、許すわけがない。

「おい。なんか、仕事ない？」

ぼくは、かつての同僚サカキに連絡した。

「らく々な仕事があるよ」とサカキは忙しそうに言った。

「それ、頼むよ」

そしてぼくは、少しずつIT関連の仕事を始めようになった。は

つきり言つて、それはきつかった。ぼくは、ほとんど毎日のように出入りしていた《ギター大好き！！の集まり》にも行けなくなってしまうた。

でも、それ以上に、ぼくには大事なものがあつた。

アズミ、待つてくれ。ぼくは、きみを必ず、迎えに行くから。

### 第十三話（アズミの消息）

ぼくとアズミは、毎日連絡を取り合っていた。

しかしある日突然、アズミからの連絡が途絶えた。

「アズミ、どうしたんだ…？」

ぼくは、起きているあいだ中、気になってそのことばかりを考えていた。

あの、厳しい父親が、彼女のケータイやパソコンをも奪ってしまったのだろうか。

『最近、アズミ見てない？』

ぼくは、『ギター大好き！！の集まり』の常連たちに尋ねた。

『あれ？アズミと一緒に住んでたんじゃないの？』>亮平』

『理由があつて家に帰ってるんだ、いま』

『え……そうだったんだ』

チャットルームの常連たちは、急に興味をそそられたようだった。

『連絡がつかないって、そりゃケータイ、壊れたんだろ、ふつーに』

『じゃ、なんでこの部屋にこないわけ？』

『パソコンもバットで殴られて、とかー』

そんななかで、ケンタがぼそつと書き込んできた。

『アズミちゃん、このまえ、なんかの曲をリクエストして帰っていったよ』

『このまえって、いつ？』とぼく。

『えっと、ここ2・3日前って話じゃないなあ。いつだったかな』

『とにかく、ここに来たら、ぼくが心配してるってこと、伝えてくれないかな』

ぼくはそれだけをケンタに書き込んで、死にそうに疲れた身体を、布団の上にはったりと横たえた。

アズミ…、どうなっちゃったんだ？ぼくは心配でたまらない。きみの、元気な声が聞きたい。  
頼むから、ぼくの電話に出てくれ。

だが、アズミからの返事は、さらに2日経っても来なかった。

ぼくは、仕事どころではなくなった。仕事を休んで、ぼくはアズミの所持品のなかから、彼女の住所の手がかりを探し始めた。

もう、なんだっていい。あのカミナリ親父にどなられたって。念のため、ぼくは幽閉されているアズミのために、相当量の薬を用意していいこうと思っていた。こっそり渡す機会があれば、これで彼女は眠れる。

「でも、今度会ったら」

ぼくは、覚悟していた。

「もし、今度会ったら、ぼくは、アズミを奪って帰るかもしれない」

「

ぼくがアズミのコートのポケットを調べていたそのとき、待ち焦がれていたぼくのケータイが鳴った。

アズミだ！！

「アズミ、どうしたんだよ！！」

ぼくはほとんど、ケータイに向かって絶叫していた。

「心配したろー！！」

だが、電話に出たその声は、アズミとは別の女性の声だった。

## 第十四話（アズミからのメッセージ）

ぼくは、薄暗い部屋のなかで、電話の内容をひとつひとつ思い出す。

「行徳亮平さんですか？」

電話の相手は尋ねた。

ぼくは「…そうですが…」とまどう。

「わたくし、篠田アズミの母でございます。行徳さんにお伝えしたいことがあります」

ぼくの心臓は、これまでにないほど、どくどくと波打っていた。いったいなにが始まるんだ？！

アズミの母親は、一息ついてから言った。

「失礼ですが、行徳さんは、うちの娘とお付き合いされていたのでしょうか」

「……はい。いま、しています」

ぼくの緊張は、頂点にたかまっていた。

「そうですか。…じつは、アズミは6日まえの深夜、亡くなりました」

「えっ？………」

その後、ぼくは、自分がなにを言ったのか、よく覚えていない。ただ、

「どうしてですか？」「ほんとうに？」をバカみたいに繰り返していたように思う。

「アズミは、5日まえの早朝、自室に面したベランダで倒れているのが見つかりました」

「解剖によると、心臓麻痺だったそうです。自室には食べたあとのカップラーメンが残っていました」

「おそらく、深夜眠れずラーメンを食べたあと、ベランダへタバコを吸いに出たのでしょう。わたしたちとしても、ほんとうに残念な

気持ちです。

「ぼくは、焦点の合わない目で、テーブルの上の睡眠薬の山をぼーっと眺めた。」

「アズミがこの世にもういないなんて、3日経つたいまでも、まったく信じる事が出来ない。」

「アズミの机を整理していましたが、いちばん目につく最上段の引き出しに、メモ書きがありました。『万が一、わたしが死んだらこの人に連絡してください』と、そこに行徳さんの連絡先が書いてあったんです。それで、行徳さんにお電話させていただきました。」

「アズミが、自分の死期を悟っていたというのか？いや、そんなことがあるはずがない。」

「でも、彼女が飲んでいた薬の量は、確かに、いつ死んでもおかしくないくらいのもだった。」

「ぼくが悪いんだ」

「ぼくは、部屋のなかでひとりつぶやいた。」

「ぼくが、アズミを止められなかったから……」

「ぼくは、胸にこみ上げてくるものを抑えきれずに、ふたたび、大声で吼えるように泣き始めた。」

「アズミ、ぼくのいちばん大事な人。」

「もう、きみに、エマージェンシーコールぼくは緊急電話を出来ないの？」

「薬に依存は駄目だけど、アディクトわたしに依存ならうれしいわって、きみは言ったじゃないか。」

「ぼくは、きみに依存していた。」

「きみだけを愛していた。」

「アズミ……アズミ……」

「まだアズミの匂いの残るクリーム色のコートを抱きしめながら、ぼくは」



くの胸は激しい痛みと悲しみでぐしゃぐしゃになった。

……何時間、そうしていたかわからない。

やがてぼくは、涙も枯れたうつろな目を上げて、壁のクリップボードを見た。

そこには、エリック・クラプトンの歌詞があつた。

それは、ぼくがアズミに歌ってあげるはずの、あの曲だった。

”Tears in Heaven”：

「ぼくは強くなくてはならない、このまま生き続けなければなら  
ない。

ぼくは天国にいられる男じゃないから」

その紙は、まるでなにかの暗示のようにぶら下がっていた。

神さま、これはアズミからのメッセージでしょうか？

## 第十五話（再会）

誰もが、ぼくを遠巻きにして見ていた。

昨日の、《ギター大好き！！の集まり》でさえそうだった。

『アズミ…死んじやうなんて…』

『なんか言動おかしいよ？>亮平』

『亮平、寝てないんじゃないのか？もっと落ち着いてから話そう』  
とケンタまでもが言った。

そのとき、誰か知らない人物からメッセージが届いた。

驚いたことに、それはコージだった。彼は、ハンドルネームを変えて、このチャットルームにやって来ていた。

『アズミは残念だったな』

ぼくは、彼がなにを言い出すのかと身構えた。

『みんなには信じてもらえないだろうけど』とコージは切り出した。

『俺は、サヤのことをいちばんに想っていたんだ』

「……」

『でも、俺はそこらじゅうの女に声をかける悪い癖があつてな。じつは俺らしくないけど、彼女が死んだあと、俺は走る車に飛び込みしまったんだ』

『え』

『酔つてたんだよ。それで、頭を打って病院で意識がないときに、あの世でサヤに会った。周りは夢だろうって言うけどほんとだよ。彼女はぼくを許してくれたかのように、ぼくに手を振ってくれたんだ』

『そうなのか……』

『すまん。一言、なにか言いたくてな』

それじゃあ、ぼくも、死ねばアズミにまた会えるんだろうか？

ぼくは、ふと我に返った。

そして。

ぼくは、アズミのもとへ行くために、テーブルの上の睡眠薬を飲み干していった。

……ぼくは、とてつもなく、美しい場所にいた。

いちめんの、黄金色の花の咲く野原。目のまえには、一筋の道があった。

ぼくは、なにも考えず、ただ、ふわふわとその道を歩いていった。ふいに、目の前にキラキラと光る川が現れる。ぼくは、驚きで目を見張った。

川の方こうに、アズミがいる――！

「アズミ――！！」

ぼくは大声で叫んだ。

アズミは口で「亮平」と言ったが、その声は聞こえなかった。

アズミは、やさしくぼくに手を振ってくれた。柔らかな、その手つき。

ぼくは、アズミのもとへ行こうと、川に向かって走り始めた。よく見ると、アズミの横に、ギターを抱えた女の子がいた。

「サヤ？！」

ギターを持った女の子はこくんとうなずいた。

「サヤ――！コージとここで会ったのか――？！」

彼女ら二人は、すべてわかっていている様子で、うんうんと笑ってうなずいた。

ぼくは、アズミを抱きしめたい一心で、急いで川のなかへ入っていた。アズミは、ぼくを見て、少し困ったかのような笑顔を浮かべた。

「まだ」とアズミの口が動く。

「まだ?!」

「まだ、駄目」

「駄目って、なんだ?!」

アズミが、いたずらっぽいやつで顔でぼくの後ろを指さす。そして、またあの柔らかな手つきで、ぼくに手を振った。

そのとき、巨大な力がぼくの背中を引っぱり、ぼくは、いきなり暗いトンネルのなかへ飲み込まれていった。

「アズミッ……!!」

## 第十六話（目覚め）

ピッピッピッ…と電子音がする。

「覚醒しました」と、誰かがパタパタと駆けていく音がする。

なんだ？アズミはどこへ行っちゃったんだ？？

ぼくはわけがわからず、呆然としていた。

「行徳さん、わかります？」

と医師らしき人が、ぼくに尋ねる。

「あなたはご自宅で倒れているところを、警察官に発見されたんです」

「あなたの仕事先の人が、何度電話しても通じないって通報したんですよ。無茶はいけませんよ」

ぼくは、肺炎にかかっていた。

大量の薬が、気管支を通じて肺に入ってしまったのだ。ぼくは、はじめて、自分が死にそこねたことを知った。

「アズミが、まだ早いつて言っただんだ…」

ぼくの口元に注目した看護師の女性に、ぼくは軽く首をふった。

ICUを出て一般病棟に移ると、窓の外から、太陽の下で燃える緑の木々が見えた。

「そういえば、胸が痛まないな…」

ぼくは、不思議な思いで、自分の胸を押さえてみた。

もちろん、肺炎の痛みはあったが、それといままでの激痛とは、まったく異なったものだった。

ぼくを長年、苦しめてきたあの痛み。

あの胸に突き刺さった壊れたガラスの破片が、肺炎と一緒にどこかへ流れてしまったのだろうか？

ぼくは結局、3ヶ月間入院していた。

「びっくりしたよ、もう。調子はどう？」

とサカキが見舞いに来てくれた。

「もうすぐ退院できるってさ」

「仕事の方は、続けてやれるようにしておいたからな。早く元氣になつて復活しろよ」

超忙しいくせに、サカキは面倒見のいいやつだ。ぼくは、彼にころからお礼を言つた。

窓の外からやってくる、さわやかな風が心地よい。

ぼくは、時折、"Tears in Heaven"をヘッドホンで聴いた。

これはアズミからのメッセージだ。

「ぼくは強くなくてはならない、  
このまま生き続けなければならぬ」

そうだ、アズミ。

どんなことがあつても、ぼくは。

## 第十七話（最終話）

退院してからすぐに、ぼくは《ギター大好き！！の集まり》に顔を出した。

『亮平——！！』

『退院、（＼＼）ノ。・・・オメデトオ』

『もう、大丈夫なのか？？』

ぼくの入院のことは、ケンタを通じて、みんなが知っていた。

『じつは、みんなで反省してたんだよ。アズミちゃんが亡くなったとき、もつと亮平になんか言ってやればよかったって』

『大丈夫だよ』

ぼくは笑った。

ミルクもいた。彼女は、おずおずと『オメデト』と書いてきた。

ぼくも、『アリガト』とかわいく書いておいた。

『あつ、そうだ！>亮平』

唐突に、ケンタが書き込んできた。

『アズミちゃんが最後に来た日にリクエストした曲、思い出したよ。エリック・クラプトンの』

『Tears in Heaven』だろ？』

ぼくは、小さく笑ってしまった。

これは、アズミからのプレゼントだ。そう思った。

アズミが亡くなってから、ぼくは彼女に線香の一本もあげていなかった。アズミの両親から、ぜひ来てくれと言われていたが、なぜかずっと保留にしていた。

…たぶん、自分のなかで、アズミの死を認めたくない気持ちが、まだどこかにあったんだろう。

「ようこそ。どうぞ」

アズミの両親は、一人娘を失って、絆を深めたかのようにだった。ぼくは、彼らに招かれて、アズミの遺影のある部屋へ入った。そこには、満面の笑みを浮かべるアズミの姿があった。

ぼくは、線香をあげて、アズミに手を合わせた。

「アズミ。ぼくのこと、これからもずっと見ててくれよ。…」

ぼくは、こころのなかで、彼女の手をぎゅっと握った。

外へ出ると、そこには11月の高い空が、目もくらむほどに大きくひろがっていた。

あのどこかに、アズミはいるんだろうか。

アズミは、ぼくに生きていかなきゃいけないんだと教えてくれた。

ぼくは、いつのまにか、あの曲を口ずさんでいた。

ぼくらは、いつでも会える場所にいるんだ。

アズミ、好きだよ。

あるとき、ぼくに手を振ってくれて、ほんとうにありがとう。

(了)



## 第十七話（最終話）（後書き）

一度完結してから、第十六話が完全に抜けていたことに、9日も経ってから気がつきました。

その間、読んでくださった方は、なんのことかわからなかったのでは…。反省です。悲しい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4609d/>

---

Tears in Heaven

2010年10月14日01時54分発行